

令和6年度

不登校対策に係る 取組事例



取組事例から学ぶ

不登校対策に係る取組のポイント

- ★ 学校が安全・安心な居場所となる「魅力ある学校づくり」を進めること
- 1 個に応じた分かりやすい学習指導の充実を図ること
- 2 児童生徒の SOS を受け止める教職員の力の向上を図ること
- 3 学級担任や教育相談コーディネーター、養護教諭、SC、SSW等とが連携し、多角的・多面的な児童生徒理解を可能とする教育相談体制を築くこと
- 4 校内教育支援センター等で、安心して過ごせるようにすること
- 5 オンラインやICTを適切に活用し、教育機会の提供や客観的な児童生徒の状況把握を進めること
- 6 校種を越えての情報連携を丁寧に進めること



岩手県教育委員会

不登校対策に係る取組事例

- 1 北上市立和賀西小学校……………P 2
ICT 教育相談の推進～保健室相談フォームの活用を通して～
- 2 大槌町立大槌学園……………P 3
チームで取り組む不登校対策～アクションシート等の活用を通して～
- 3 普代村立普代小学校……………P 4
校内教育支援センターの運営～すべての子供を学びにつなぐために～
- 4 盛岡市立仙北中学校……………P 5
Sルーム（校内教育支援センター）の運営
～「安心して学校生活を過ごせる場所」づくりを目指して～
- 5 奥州市立水沢南中学校……………P 6
ひとりも独りにしない学びの場を保障する教育支援
- 6 山田町立山田中学校……………P 7
山田祭りへの全校生徒参加 ～発達支持的生徒指導への転換～



北上市立和賀西小学校

ICT 教育相談の推進
～保健室相談フォームの活用を通して～

概要

本校では、いじめや不登校に関わる悩みやひきこもりの早期発見・早期対応をねらいとして、Google フォームで保健室相談フォームを作成し、全校児童と保護者を対象に相談を 24 時間受け付ける取組を行っている。

1 周知について

- (1) 児童には、年度の始めに二次元バーコードを記載した案内カード（名刺大）を使って、相談フォームの案内を行っている。児童が必要なときに利用できるよう、案内カードは普段はタブレットに貼り付けており、いつでもはがして使えるようにしている。
- (2) 保護者には、4 月 P T A 全体会の際に、相談フォームについての案内を行っている。二次元バーコードは「ほけんだより」に添付し、いつでもアクセスできる環境を整えている。

案内カードの一部
（名刺大）

2 積極的な利用を促す工夫

- (1) フォーム冒頭の説明に、「秘密を守ること」「解決のために他の協力が必要な時は相談者本人に確認すること」を明記し、安心して使えることを伝えている。
- (2) 相談内容に係り、養護教諭の対応を以下のように選択できるようにしている。
 - ①「すぐに話したい」 ②「まだ話したくないが知っておいてほしい」
 - ③「カウンセラーにつないでほしい」 ④「その他（自由記述）」
 ②を入れることで、心理的ハードルを下げる効果をねらっている。

3 フォーム利用があった場合の対応

- (1) 同日中に管理職、生徒指導担当等と連携を図り、どう支援していくか検討し、組織的に対応している。
- (2) 養護教諭の対応で②を選択した場合でも、相談者にフォームの内容を受け取ったことを伝え、いつでも話を聞く時間を作れること、常に見守っていることを伝える。

4 留意していること

名称は「保健室相談フォーム」であるが、養護教諭一人で対応するものではなく、必ず報告し、組織的に対応している。

成果

- ・ 24 時間いつでもアクセスできるため、周りの目を気にせずに相談ができるようになった。
- ・ 友だちから悪口を言われる、嫌なことをされるなどのいじめ案件にも早期対応できるようになった。
- ・ 自分から保健室を利用したり、相談したりできない内気な児童からの悩みを受け取ることができるようになった。
- ・ 保護者からも利用があり、きめ細かな対応が取ることができるようになった。
- ・ 年 3 回のいじめアンケートと合わせて、児童の悩みや困りごとに早期対応する校内体制ができているため、児童間の大きなトラブルがなくなった。

課題

- ・ フォームの管理者を増やすことについて検討していきたい。

大槌町立大槌学園

チームで取り組む不登校対策 ～アクションシート等の活用を通して～

概要

大槌学園は、平成 27 年に小中一貫教育校となり、1 年後に義務教育学校がスタートして今年度で 9 年になる。本学園の不登校対策として、担任が一人で抱え込まずに組織・チームで取り組めるよう、アクションシート等を作成し、2 学期から活用している。1～9 年生 578 名のうち、欠席が続いている子や登校しぶりで休んでいる子を全職員で確認し、すぐにケース会議等につなげられるようにしている。

①アクションシート

エクセルシートは、一人ずつの個票になっており、しぶりの欠席はその都度記入している（中・長期不登校の場合は週 1 など）。「様子」の欄は具体的に記入している担任が多く、対応の記録としても活用されている。

〇年〇組 氏名 〇〇 〇〇		方 法				相手方	対応	様子（簡単に）
月日	曜	時刻	電話	家庭訪問	面談			
8月30日	金	16:30	○			本人	担任	「来週から登校したい。」と話す。
9月2日	月	8:00	○			母	担任	「ふさぎこんでいる。」という。
9月2日	月	15:00			○	S C	担任	情報共有一明日、家庭訪問を行う。
9月3日	火	17:00		○		本人	担任	「〇〇が気になる。」と話す。 〇〇の解決方法についてアドバイスをす。

アクションシート（例）

②児童生徒の欠席の様子一覧

令和 4・5 年度で 30 日以上欠席の子や、令和 6 年度に欠席が増えた子を一覧にまとめ、毎日欠席の様子を記録している。

アクションシートが個票であるのに対し、一覧表は学園分が一目で分かるようにしている。

年組	氏 名	R 4 欠席	R 5 欠席	R 6 1 学期 欠席	8/19 (月)	8/20 (火)	8/21 (水)
		2	4 0	1 5	欠席	欠席	遅
		5	3 2	7	遅	欠席	遅
		3 3	1 5	1		けやき	
		2 6	1 7	0			別室
		2 7	6 5	1 0	遅	欠席	
		1 3	3 5	0			
		0	3 0	3	欠席	欠席	
		1 0	2 8	2			早

児童生徒の欠席の様子一覧（例）

③e メッセージの欠席等の連絡

e メッセージに届く家庭からの欠席や遅刻等の理由欄に今年度「登校しぶり」を加え、不登校の初期段階を見落とさないようにしている。

成果

- ・パソコン上のアクションシートを見ることで、全職員が子供たちの様子をすぐに把握できる。その結果、学年や学団・生徒指導担当等、複数の目でチェックでき、速やかにケース会議につながるなど担任が一人で抱え込むことが減った。毎週行われている情報交換会では、シートや欠席一覧を活用し、情報交換がしやすくなった。
- ・「アクションシートに記入しなければいけない」という意識が、「こまめに子供に対応しなければ」という行動につながっている。
- ・シートを見ることで、担任が子供にアクションをしているかどうか分かるため、アクションが不足している場合、担任に声をかけやすい。また、効果的なアクションをしている場合、参考にできる。

課題

- ・電話連絡や家庭訪問等、その都度の記入は担任の負担が大きくなるため、負担をかけすぎない工夫が必要である。
- ・シートの見出し部分を色分けするなど、さらに効果的な活用を考えたい。
- ・不登校対策は、何よりも初期対応が大切である。欠席 3 日目までにさらに速やかな対応ができるよう検討していきたい。

普代村立普代小学校

校内教育支援センターの運営
～すべての子供を学びにつなぐために～

概要

すべての子供が安心して生活・学習をするための居場所をつくり、多様な学びの機会を確保することで、一人一人の学びと成長をサポートできるよう、以下のような取組を行った。

①環境面での「居場所づくり」

パーテーションを設置し、パーソナルスペースを確保するとともに、一部にカーペットを敷き、クッションを置くなど、落ち着ける環境の中でゆとりをもって過ごすことのできるオープンスペースを設けた。



パーテーションの設置

②心理面での「居場所づくり」

支援に関わる際の基本的な姿勢として、児童の心に寄り添うこととし、児童が自分の思いや考えを話すことができる時間や場面を大切にしている。また、センター内での過ごし方については、一時的、短時間での利用も認めるとともに、個々の意思を尊重し、自己決定を最優先にしている。

③個に応じた学習支援

各学年のワークやプリント学習を中心に、一人一人の実態に応じて支援している。

④校内体制の構築

校内教育支援センター支援員（普代村会計年度任用職員）が常駐し、教職員と連携して支援を行っている。学習内容や支援内容などの情報をその日のうちに共有するために、校内教育支援センター日誌を作成・活用している。



オープンスペース

⑤保護者への周知

運営開始に際して、学校通信で設置の目的等を紹介し、利用に対する保護者の理解促進を図った。

成果

- ・「教室には行けないけれど校内教育支援センターなら」という形での利用が見られ、「無理して教室に入らなくてもよい」という気持ちの上での負担軽減を図ることができた。また、一時的、短時間での利用も多く、教室に行くまでの心の安定を図り、エネルギーを貯めるための場所としての役割を果たしている。
- ・一時的に校内教育支援センターを利用することで、学級での人間関係のトラブルなどについてもじっくりと話を聞くことができ、解決に至る場合もあった。
- ・教職員間の情報交換を密にすることによって、共通理解のもと、児童の実態に合わせた支援を行うことができた。

課題

- ・個々の状況に合わせた学習支援をさらに充実させるとともに、オンライン授業の実施など、ICTを活用した学習方法の検討を進めたい。
- ・今後、さまざまなニーズをもった児童が増加することも想定されるため、関係機関と連携しながら教育相談やアセスメントを充実させ、綿密な支援計画を立てた上での一層の支援をしたい。

盛岡市立仙北中学校

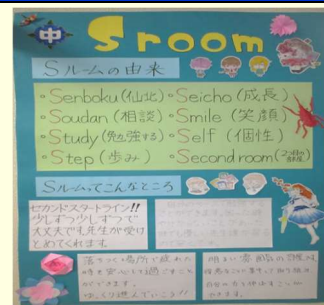
Sルーム（校内教育支援センター）の運営 ～「安心して学校生活を過ごせる場所」づくりを目指して～

概要

「校内教育支援センター」を「Sルーム」と名づけ、さまざまな事情で教室に入れない生徒が、学校で安心して過ごせる場所となるように環境を整え、教室復帰への足がかりとしている。

①「Sルーム」の名前の由来について

Sルームの「S」はさまざまな言葉の頭文字となっている。Sルームの生徒たちが考えた「S」には Senboku (仙北)、Seicho (成長) Soudan (相談)、Smile (笑顔)、Study (勉強する)、Self (個性)、Step (歩み)、Shiawase (幸せ)、Second room (二つ目の部屋) など、いろいろな意味が込められている。



「Sルーム」の名前の由来

②「Sルーム」での生活について

- ・日課表にその日にやることを自分で決めて記入して取り組み、振り返りも行っている。下校時に日課表をファイルにはさみ、担任に提出している。担任がコメントを記入して次の日に本人に返却している。
- ・自学自習をしているが、複数人で勉強したり、読書や自分の得意分野に取り組んだりしている。
- ・サポート授業として5教科の授業を週に一回、Sルームで受けることができる。
- ・Sルームから教室へ行き、授業を受けることができる。
- ・「利用者同士の過ごし方を尊重する。」「相手意識を大切にする。」などの約束ごとを決めている。



サポート授業も受けられる

③「Sルーム」の生徒たちの情報共有・共通理解について

- ・Sルームは学校生活サポート、不登校生徒等対策相談員、スクールアシスタントが担当している。常に教育相談担当（生徒指導主事）、担任、学年主任と相談し、情報を共有しながら生徒一人一人に対応している。
- ・毎日Sルーム担当者が生徒一人一人の様子を記入し、教育相談担当と共通理解を図っている。週末には校長、副校長、主幹教諭、教務主任、養護教諭、学年主任、担任にファイルを回覧し、共通理解を図っている。



「Sルーム」入口

成果

- ・生徒たちは悩みを話せるようになり、相手意識を大切にしながら他の生徒とコミュニケーションを取れるようになってきている。
- ・「戻れる場所」「居場所がある」という安心感から、欠席日数が減ったり、教室に行ったりする生徒が増えている。
- ・「報告・連絡・相談」「情報共有・共通理解」を意識して取り組むことにより、生徒に寄り添った指導支援が図られている。
- ・「チーム仙北中」として、連携しながら組織的に取り組むことができている。



「Sルーム」の様子

課題

- ・生徒一人一人に応じた学習支援や評価について、サポート授業担当者と教科担任の連携を図りながら、今後も職員全体で工夫していくことが必要である。
- ・今後も生徒個々に対応する具体的な支援方法を組織的に取り組むことが大切である。

奥州市立水沢南中学校

ひとりも独りにしない学びの場を保障する教育支援

概要

本校では、いくつかの教室を社会的自立のための空間として、生徒の状況に合わせて整備している。具体的には以下のとおりである。

- 1 個別支援コーディネーターと特別支援教育コーディネーターが中心となり、支援の窓口、時間割調整、学習評価（出来ない場合には文章評価）、保護者対応・連携、職員間の連携、一般生徒の個別学習支援と保護者との連携などを行った。
- 2 学びの選択肢の場を増やした。
 - (1) 自学を望む生徒のための「自習室」
 - (2) 学習支援を受けたい生徒のための「学習室」
 - (3) 登校を目指す生徒のためのプレイルームの他、個別ブースの部屋やオンライン用の部屋がある。
- 3 保護者との連携・連絡の方法を工夫した。欠席や登校時間の連絡には個別支援コーディネーターが対応し、学年や担任、チームと共有する。配布物や連絡、期末面談も対応している。
- 4 個別支援チームと学年・担任・養護教諭との情報共有の方法を工夫した。即時的な情報共有はグループラインを使う。定期的な情報共有や方針の確認は隔週金曜日の個別支援ミーティングと、毎週火曜日の支援会議で実施した。



パーティションで学習室を区切り、
最大4人の教員が個別指導



一斉美術の授業

自習室・学習室を「分かる・出来るようになる空間」、そして「安心できる居場所」にするためには、スタッフが同一歩調で当たることが大事であり、日頃の会話や情報交換を大切にしながら対応に当たっている。



クリスマスの飾り付け



プラモデル作りがきっかけで登校

成果

- ・学習保障（授業の実施）と評価を結びつけることで、学校に来れば「分かる」「出来るようになる」ということが登校刺激になっている生徒は多い。また個別支援コーディネーターが担任の役割を果たすことで、保護者との連絡がスムーズになり、保護者にとっても学校が足の向き易い場所になっていると感じる。更に個別支援スタッフが担任的な役割を果たすことで、担任や養護教諭の負担軽減を図ることができている。
- ・自習室に通う生徒とは別に、教室で授業を受けている生徒でも、勉強で強い困り感を感じている生徒への個別学習支援の実施により、基礎力を身につけ教室に戻った生徒、得点を上げて自信を持てるようになった生徒も多い。

課題

- ・持続可能なものにしていく必要性を感じているが、学習指導については職員の配置により実施できる教科は年度で変わってくるので、次年度については見通せない部分がある。また家から出られず個別支援として関わることが出来ない生徒への個別対応の難しさを感じている。

山田町立山田中学校

山田祭りへの全校生徒参加 ～発達支持的生徒指導への転換～

概要

山田町の最大イベントである「山田祭り」に全校生徒が何らかの形で参加する取組を行った。地域の良さや地域財産（人材）に触れることで自分の良さを発見し、周囲の人々から認められ支えられていることの実感、さらには地域の復興に貢献しているという思いを持たせることで自己肯定感を高めることがねらいである。山田祭り当日までの主な流れは以下のとおりである。

- ①生徒会リーダー研修会（1月）…地元出身の前校長から「地域の活動に協力できる生徒になってほしい」という講話を頂いた。生徒会執行部が新年度の具体的な活動方針を考えることとなった。

- ②生徒総会で全校生徒へ提案（5月）…生徒総会において、地域の伝統を守り山田町を盛り上げるために「山田祭り」への全校生徒参加が、令和6年度の生徒会特別活動方針として提案され可決された。

- ③「お祭りサミット」の実施（6月）…町の地域おこし協力隊の方をファシリテーターとし、町長や神社宮司様、祭り芸能団体の代表者の方々から「祭りの歴史」や「祭りへの思い」などの講話を頂いた。

- ④多様な形態での参加…様々な家庭事情や不登校生徒等のことを考慮し、ステージ発表やボランティアでの参加や1日のみの参加（祭りは3日間開催）も可能とするなど、多様な参加形態を設けた。

- ⑤「山田祭り」当日（9月）…各芸能団体に担当教員を2名ずつ配置。緊急時マニュアルを作成し徹底を図った。



お祭りサミットの様子



山田祭りの様子



ボランティア活動の様子

成果

- ・昨年度までの教員による巡視活動から、生徒会が主導する祭りへの全校生徒参加に大きくシフトした。地域の方々の協力も得ながら生徒が主体的に活動を行うことで、地域に貢献している、地域に必要とされているといった自己有用感や自己肯定感を高めることができた。祭り期間中の生徒指導上のトラブルもなかった。
- ・生徒会執行部が自ら発案・発信し、自分たちが地域を盛り上げる担い手として貢献したことで、リーダーが大きな達成感を得ることができた。
- ・多様な参加形態を設けたことで、不登校生徒も数名ボランティア活動に参加することができた。

課題

- ・今回の取組を持続可能なものにしていくこと。生徒会を中心に自分たちが地域のためにできることを考え、地域と学校が惜しみなく協力体制を築きながら生徒達を後押ししていくサイクルを作り上げていくことが必要である。